



評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取り組み状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の改善策
①教育課程 学習指導	主体的に学ぶ子を育てる授業づくり	「教科書で教える」授業スタイルの国語科の授業を通して、子どもたちが学習のめあて達成に向けて主体的な学びができるよう、「単元構想シートを活用した単元構想」「教材で何を学ぶかを明確にした目標設定と言語活動の精選」「教師モデルの活用」「考えを持ち上げるための交流時間の確保」「分科小的価値観を意図した実生活への活用」などの取組を行う。	研究主任	昨年度は水戸部修治先生との授業研究により、「教科書で教える」授業スタイルへの大きな転換を図ることができた。しかし、児童は国語科の学習を楽しんでいると感じておらず、国語科を日常に生かしている実感も薄い。児童が主体的に学び、自己の成長を実感できるような授業の実践が必要である。	[満足度指標] 国語科において、児童が主体的に学ぶことができたかどうか。	国語科の授業で主体的に学べたと感じている児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上90%未満 C: 70%以上80%未満 D: 70%未満	7月と12月に児童にアンケートを実施。	B	A	国語の時間に自分の考えを話し書きしたりする時間が確保されており、アンケートでも95.9%の児童が、自ら考え、表現したと感じていることが分かった。児童の主体性を引き出す国語の授業改善が実を結んでいる。今後は、個別最適な学びの実現に向けて、国語の授業研究で得たことを他教科にも生かしていくことが望まれる。
	確実な学力向上	目標達成にこだわった授業を行い単元末テスト平均80点以上学校全体90%以上を目指す。また、単元末評価問題として、学力調査問題に取り組み、授業改善を積み重ね、学力テスト:正答率7割以上を目標に取り組む。単元末評価問題を解ける力をめざす学力としてとらえ、一人一人の児童に力がついたか具体的に検証し、授業改善につなげ、確実な学力向上につなげる。	教務主任	単元が始まる前に単元末評価問題(過去問)を確認し、具体的にどの時間にどんな手立てをとるのかなど単元構想すること、授業改善につなげ、確実な学力の向上につなげていく。	[成果指標] 単元末テストクラス平均:80点以上の割合 単元末評価問題として行った学力調査問題の正答率が70%以上	単元末テストクラス平均:80点以上の割合が A: 80%以上 B: 70%以上80%未満 C: 70%以上80%未満 D: 70%未満 単元末評価問題として行った学力調査問題の正答率が A: 70%以上 B: 60%以上70%未満 C: 50%以上60%未満 D: 50%未満	学期末ごとにクラス平均点とその割合を検証	B	B	教師が、授業や単元終了後に何ができるようにするのかを明確にし、具体的な手立てをとる。また、ここは主に児童に任せる、ここは教師がじっくり指導し、考えさせるといった見直しをもった単元計画を立てて学習を進める。
	家庭学習の充実と定着を図る。	「分科小家庭学習のすすめ」「おすす自学メニュー」を作成し、学校と家庭で連携を図ることで家庭学習の充実と定着を図る。よい自学を紹介し、意欲の向上を図る。	教務主任	「分科小家庭学習のすすめ」や「おすす自学メニュー」を作成し、児童・家庭と共通理解を図る。よい自学を紹介することで、児童の自学(家庭学習)に対する意欲を高めていく。	[成果指標] 学年相応(学年×10分+10分以上)の家庭学習の習慣が身につけているか。	学年相応の家庭学習が身につけている児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	各学期ごとに児童と教職員にアンケートを実施	D	D	児童の割合は、66%であった。メディアアンケートの結果より、平日にメディア機器を使っている割合は、23時間以上24、3時間以上が13.5%という結果から、学習時間が確保できないことやメディア依存の心配もあり、家庭との連携が必要である。また、多様な学習スタイルがある中で、学期で家庭学習を評価することも見直しが必要ではないか。
	ICTを活用して、協働的で、対話的な学びのある授業を実践する	ICTサポーターに、端末操作についての相談の場を設ける。様々な教科で、児童の考えを共有する場面を活用していく。毎月、校内研修を定期的に行い、授業実践の交流を図る。	情報担当	ICTを使った授業を積極的に実践して、児童も抵抗なくスライドを作成したり、発表したりとICTを活用している。今後、更に、協働的で対話的な授業のために、効果的なICTの活用方法を取り入れていく必要がある。	[満足度指標] ICTを使った授業で、考えを深められたか。	ICTのおかげで考えや理解が深められたという児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童にアンケートを実施。	A	A	児童アンケートでは、A+Bの割合が90%であり、7月より僅かに減少したが、Aの割合が上がっている。特に、オウリングを通して児童が自分の考えを深められ、効果的に活用できた。来年度も、協働的な学びや個別最適な学びにつなげられるような、ICTの効果的な活用方法や情報交換を行う。
	思考の深まりが見られる道徳授業の推進	道徳の授業において、児童を引き込み中心発問と児童の考えが可視化された思考が深まる板書を意識し、思考の深まりのある授業を行う。	道徳教育推進教師	学習の最後の児童の姿や、振り返りを意識した授業の組み立てを行ってきた。また、児童が考えたい中心発問や児童の考えが可視化された思考の深まる板書を工夫し、主体的で対話的な深い学びのある授業を意識してきた。	[満足度指標] 友達と考えを交流することで、自分の考えを深めたり、新しい考え方に気づくことができたか。	道徳の授業で友達と考えを交流することで、自分の考えを深めたり、新しい考え方に気づくことができた児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童にアンケートを実施	B	B	児童アンケートでは、A+Bの割合が7月よりも僅かだが上がっている。3学期も各担任が学級の実態に合った方法で、交流を大切に授業づくりを続け、より児童の考えを深めたり新しい考えに気づかせたりしてきた。
	読書活動の充実・質的向上	朝読書で集中して読書する時間を確保する。また、3冊借りられる日の設定や図書委員の取組み、おすすの本の紹介などを通して、読書活動の充実を図る。	図書担当	読書が好きで、集中して読むことができる児童が多い。3冊借りられる日の図書館利用は多いが、その他の日との差が大きいことから、図書室に行きつけを増やすことで、読書活動の充実をさらに進めることを目指す。	[成果指標] 図書室を利用したり、朝読書などで読書に取り組みたかどうか。	図書室を利用したり、朝読書などで読書に取り組んでいる児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童にアンケートを実施	C	C	図書室を積極的に利用したと感じている児童が79%に留まった。今年度は年度途中でデジタル図書館の利用も始まっている。特に、オウリング期間は、見た目に定評されている。授業での読書の活用も昨年より進んで実施している。図書室の利用より読書は進んでいるものがあると思われる。児童の積極的な読書の指標を考慮し直す必要がある。
②生徒指導	他者を認め、安心して生活できる学校づくり	毎月の児童理解の会での情報共有及び教職員によるいじめチェック表の実施、年4回のいじめアンケートの活用などを通して、いじめの未然防止と早期発見・対応に努める。	生徒指導主事	いじめは小さな芽で摘むという認識の下、いじめを認知した時は組織的に対応を行い、指導後も複数の教職員で見取りを行ってきた。どの学級にもいじめは発生するという認識で学級経営をしている。	[満足度指標] 友だちのよいところ気づき、安心して学校生活を送れたか。	友だちのよいところ気づき、安心して学校生活を送れた児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童にアンケートを実施	B	B	児童アンケートでは、A+Bの割合が86%であり、前回のアンケートから2%減少した。2学期ではいじめを一件認知して、いじめ問題対策チームで対応したが、今後児童の安全と安心のため、職員全員で見取っていく必要がある。
	主体的にクラス、学校をよくしようとする児童の育成	学級目標を大切に、毎日ふり返り、目標を設定したりふり返ることに努める。		学級目標を飾りにするのではなく、学期初めの児童の気持ちを大切に、日々ふり返りをして短期目標を設定したりして児童の達成感と主体性を育む。	[満足度指標] 学級目標を大切に、よりよい学級、学校づくりを目指したか。	学級目標を大切に、よりよい学級、学校づくりを目指した児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童にアンケートを実施	B	B	児童アンケートでは、A+Bの割合が83%であり、前回のアンケートから2%減少した。学級目標を飾りにするのではなく、定期的ふり返る機会を持つ、よりよい学級づくりを作ろうとする集団作りを引き続き行っていく。
③キャリア教育 進路指導	キャリア教育の推進	学年ごとに自分に挑戦ナンバーを設定し、自分の目標を持って努力し振り返ることで、自己の成長を実感できるようにする。	キャリア教育担当	学校生活の様々な場面で前向きに頑張る児童が多いが、自己の成長を感じ取り、現在の活動が将来に繋がっていると意識する児童は少ない。キャリアパスポートを活用し、毎月ふり返りを行うことで、自己の成長を実感したり、新たな課題を見つけたりできる児童を育てる。	[満足度指標] 自分に挑戦ナンバーから目標を決め、達成に向けて頑張ることができたか。	自分に挑戦ナンバーから目標を決め、達成に向けて頑張ることができた児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童にアンケートを実施	B	B	中間と同じ評価ではあるが、2%低下し83%である。しかし、概ね児童は自分のキャリアについて毎月意識できるようにされている。年度末は行事も多かったため、よりキャリア教育を意識して次年度につなげていきたい。
④保健管理	規則正しい生活習慣の確立	規則正しく節度ある生活習慣の確立に向けて、児童健康委員会・母親委員会等と連携して啓発を行う。	保健主事 養護教諭	コロナ禍という現状をふまえると、早寝・早起き・メディアコントロールに加え、心の健康にも注視する必要がある。	[成果指標] 児童と保護者が「早寝・早起き・朝ご飯」「メディアコントロール」を意識して実践しているか。	実践している児童と保護者の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に児童と保護者にアンケートを実施 学期毎の生活リズムチェックカード	B	C	児童アンケート81%保護者アンケート74%。7月のアンケート時よりどちらも下がっている。メディアアンケートの結果からも平日でも3時間以上利用している率が13.5%、休日になると38.9%とあり、メディアへの依存が結果として出てきている。今後も家庭への理解を促し、正しいメディアとの関わりについて指導していきたい。
	運動能力の向上	長休みの体力づくりや体育の授業を通して、運動能力、特に走力の向上を図る。	体育担当	継続的に体力作りや学年の取り組みは行われているが、走りに課題がある。令和3年度のスポーツテストでは50m走のタイムが2学年で県平均を下回っていた。ICT機器の活用、スポーツチャレいかわへの積極的参加を通して、走力の向上を目指す必要がある。	[成果指標] 体力づくりや体育の授業を通して走力が向上し、県平均を上回ることができたか。	50m走のタイムが、1回目(5月)よりも2回目(11月)の方が上回った児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	5月と11月に50m走の測定実施		D	2回目の記録が向上した割合は60%。2回目の実施時期が1月で長雨によるコース状態も影響したと考えられる。体育の授業を中心にスポーツチャレいかわへの取り組みを奨励したが、後は年間を通して行える取り組みや児童がすすんで体力づくりをしたくなる活動を考える必要がある。
⑤安全管理	火災・不審者・地震津波を想定した避難訓練の実施	火災を想定したもの、不審者を想定したもの、地震・津波を想定したものをそれぞれ1回ずつ実施し、関係機関と緊密に連携していく。	教頭	消防署や警察署、こども園と連携をとり、児童の判断力や危機意識をさらに高める。引き渡しカードの見直しや引き渡し訓練の実施、危機管理マニュアルやアクションカードの見直しをしていく。	[満足度指標] 児童及び教職員自らが判断しなければならない避難訓練を実施し、実践的な成果があったか。	児童及び教職員自らが判断しなければならない避難訓練を実施し、実践的な成果があったか。児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケートを実施	A	A	地震、火災などを想定した訓練を実施することができた。実践に即した訓練を実施することによって、児童及び教職員の危機意識をさらに高めていきたい。
⑥特別支援教育	児童の特性に寄り添った支援の組織的支援体制の確立	支援を必要とする児童及びその保護者に対して、校内支援委員会が児童の特性に寄り添った支援の在り方を検討し、組織的に支援に取り組む。	特別支援教育コーディネーター	特別な支援が必要な児童及びその保護者に対して、校内支援委員会が児童の特性に寄り添った支援を検討し、専門機関とも連携して組織的に支援をしていく必要がある。	[努力指標] 支援を必要とする児童及びその保護者への支援について、児童の特性に寄り添い、組織的に支援することができたか。	支援が必要な児童及びその保護者に対し、組織的に支援できたか。児童の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケートを実施	A	A	困り感のある児童、そして保護者に対して校内支援委員会を随時開き、組織的に対応することができた。専門機関への連携も今後スムーズに取り計らしていきたい。
⑦組織運営 業務改善	組織の活性化や効果的・効率的な業務改善を図る。	学校経営ビジョンの具現化に向けて、学校運営委員会やそれを支える分掌部会を充実させ、チーム学校で効果的・効率的に業務改善を進める。	教頭	職員は協力的であり、組織的・効率的に動く意識は高い。経験の少なさをチームで動くことにより一人が抱える負担を少なくしていく必要がある。ICT利用による業務改善、文書の電子化を進める。	[成果指標] ICT利用による業務改善、文章の電子化を進め、時間外勤務時間が月平均50時間より少なくなる。	4月～2月までの時間外勤務時間が月平均50時間より少ない教職員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	毎月の時間外勤務時間を調査し、年の平均時間を出す。	D	C	ICT利用による業務改善、文章の電子化を進めた。校務分掌と時間外勤務時間との関係性は少ない。教材研究や学級事務などの担任としての仕事の時間の確保、効率化を模索していきたい。
⑧研修	外部講師を活用するなど、校内研修に積極的に取り組み、授業改善に努める。	研究推進委員会を中心に、校内研修会や研究授業、授業交流、外部講師の活用など、積極的に取り組み、授業改善に取り組む。	教務主任 研究主任	国語の授業改善に積極的に取り組む教師がほとんどだが、主体的に学べていると感じている児童がそれほど多くない。昨年度までの実践を生かしつつ、ますます児童が主体的に学ぶ授業にするための校内研修や研究授業を行うしていく。	[努力指標] 積極的な姿勢で研修に取り組み、授業改善に努めることができたか。	積極的に校内研修、研究授業に取り組み、授業改善に努めることができた教職員の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に教職員にアンケートを実施	A	A	「個別最適な学び」では、児童が自分で学習を調整しながら進める。児童が主体的で、尚且つ確実に学力をつけるため、効果的な方法は何か実践交流したり、研修したりしていく。
	若手教職員の早期育成を図る。	若プロを計画的に実施し、「チーム分校」で若手教職員を育てる。	若プロコーディネーター	若手教員が多く、早期に人材育成をしていくことが重要課題である。授業改善、学級経営など計画的に進めていく必要がある。	[成果指標] 校内研修や若プロで学んだことを、授業改善や学級経営等に活かしたか。	校内研修や若プロで学んだことを、授業改善や学級経営等に活かした教職員の数が A: 3人 B: 2人 C: 1人 D: なし	7月と12月に教職員にアンケートを実施	A	A	若手が多い現場では、理論だけでなく、すぐに実践に活かそう、やってみようという研修が必要である。また、学習指導や生徒指導に偏らず、教職としての資質や学校経営でビジョン力を高められるように、全ての業務で資質・能力の育成をはかる。
⑨保護者 地域との連携	学校の情報を提供する開かれた学校をめざし、信頼される学校をつくる。	学校だより、学年便り等各種便り、ホームページ等で学校や児童の様子を知らせるとともに、地域や保護者からの要望を真摯に受け止め、教育活動に必要と思われることに関しては、積極的に取り入れていく。	教頭	学校だより、ほけん便り、図書便りは定期的に発行されている。ホームページで学年の取り組みなどを随時紹介している。学期末アンケートなどで保護者の要望を聞き取り、対応している。	[満足度指標] 学校は期待に応えようとしている。	学校は期待に応えようとしていると感じている保護者の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7月と12月に保護者にアンケートを実施	B	A	保護者の意見に対し、可能な限り真摯に向き合ってきた。施設面に関しても、来年度、かなり改善が進む。保護者との対話により、信頼を得ることを今後も続けていく。
⑩教育環境 整備	児童が安全で安心して学校生活を送れるよう校舎内外の環境整備に努める。	日常的に整理、片付けを意識し、校舎内の環境整備に努める。学期に一度の管理場所の安全点検を通して、不備な箇所施設の修繕を行う。	教頭	安全点検と早期の修繕を実施しているが、校舎の老朽化に伴い、恒常的に不良箇所が発生している。	[満足度指標] 学校は、安全の確保と環境の整備に努めているか。	学校は、事故などがなく安全に配慮していると感じている保護者の割合が A: 90%以上 B: 80%以上 C: 70%以上 D: 70%未満	7、12月に保護者にアンケートを実施	A	A	大きなけががなく、児童は学校生活を送ることができた。集団登校に関して、保護者からの不安があるので、児童に対して指導を継続していく。

学校関係者評価

- 規則正しい生活習慣の確立に関して、テレビの視聴時間やゲームをする時間の長さが気になる。学校側もメディアコントロールについての取り組みを育友会と連携して啓発されているが、なかなか結果に表れていないようだ。今後とも粘り強い取り組みを期待する。
- 家庭学習の充実が、D評価で気になる。今年度から始められた個別最適な学習の取り組みと併せた宿題のあり方について、来年度に向けての学校側の明確な方針に期待したい。保護者への周知も願っている。
- コミュニティスクールの本格的な取り組みに向けて、来年度以降も学校からの情報発信を積極的に行ってほしい。地域と学校との相互の情報共有を密にしていきたい。